

汲古書院刊

富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

詞華集日本漢詩

第七卷

詞華集 日本漢詩 第七卷(第六回配本)

昭和五十八年八月 発行

定価八、五〇〇円

編者 富士川英郎

松野正巳

解題 富士川英郎

発行者 坂本健彦

印刷 モリモト印刷株式会社

発行 汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋二一五―四
電話(五五)九七四 振替東京五二六〇三五

解題

富士川英郎

本巻には文化五年に刊行された『采風集』以下、『近世名家詩鈔』（万延二年刊）に至るまでの、七種の詞華集が収められている。これらの詞華集のうちには、次の第八巻に収められているそれのような、「詩人年鑑」的な趣きと役割をもつもの（例えば『撰東七家詩鈔』『撰西六家詩鈔』のほかに、その編者が一家の見識と嗜好とを以て編んだ、例えば柏木如亭編『海内才子詩』や、小野湖山編『湖山樓詩屏風』などがあって、それが本巻の著しい特徴の一つをなしている）である。

本巻に収められている七種の詞華集のうち、その刊行の年次が最も古いのは、文化五年刊の稲毛屋山編『采風集』であるが、これはまた、宋詩の影響をうけた所謂清新性靈派の詩が全国を風靡するようになってから最初に現われたその詞華集であったのである。

稲毛屋山（一七五五—一八二二）は宝暦五年に讃岐の高松藩士重善の子として生まれた。名は直道、字は聖民、通称を官左衛門と言い、息齋という別号がある。はじめ、京都の皆川淇園の門に入り、のちに高芙蓉について篆刻を学んだが、文政五年七月に歿したという。

屋山は一般に篆刻家としてその名が聞えていたが、また、詩文に対する嗜みも深く、当時の儒者や詩人たちとの交友の範囲も頗る広がった。その『采風集』に菊池五山が寄せた序文によれば、稲毛屋山は或は京撰に寓し、或は江戸

に住んで、三都の詩人で相識でない者はなく、また、四方の詩人で三都に遊んだ者にして、屋山と相い識らなかつた

者はないというありさまであつたという。『采風集』は屋山がこれらの相識になつた詩人たちから、その時々請うて得た詩を集めた詞華集であつて、その表題の由来するところは、同じく菊池五山がその『五山堂詩話』巻一のなかで、「毛聖民直道夙以鉄筆著近選今人詩為集人詆其越俎余閱所選正変具録雖小乏鑒裁一読亦足以觀各州之風尚矣有古人採歌謡於民間之遺意因名曰採風集」と述べているところによつて知られよう。

『采風集』は芸香、嵩高、青藜、玉山の三都の四書肆から発兌されており、三卷三冊から成つてゐるが、その各巻の冒頭に編者稲毛聖民のほか、校訂者の名が二人ずつ掲げられている。即ち「卷之一」には「信濃 木寿百年」「伊賀 藤堂良道子基」、「卷之二」には「加賀 陸原淳子淳」「江戸 山地寛孟教」、「卷之三」には「備中 宮師杜詩老」「豊後 林秉民夷徳」が、それぞれその巻頭に校訂者として名をつらねてゐるが、このうち、木百年は名を寿と言ひ、百年はその字で、小峯、または愚庵と号した。揖斐高氏の『改訂・柏木如亭年譜』（昭和五十四年三月、太平書屋・近世風俗研究会）によれば、百年は明和五年（一七六八）に信濃国下水内郡蓮村上組に生まれ、家は代々庄屋をつとめ手習師匠を兼ねてゐた。本姓は三枝だが、祖父の代に土木事業の功によつて、飯山藩主本多侯から木敷（舗）の姓を賜つたのだという。寛政七年、柏木如亭が江戸を立て信州に遊んだとき、百年は彼について詩を学び、如亭が信州中野で開いた晚晴吟社という詩社のなかでの、高聖誕と並んで最も卓れた詩人となつた。『五山堂詩話』巻一のなかにも、「信中詩学如亭実開壇坫所得人才不下数人而以木百年高聖誕二子為翹楚」と言つてゐる。木百年には『静窓詩』という九頁ばかりの薄い詩集があるが、稲毛屋山とはたぶん江戸で識りあつたのだろう。

次に藤堂良道は、字を子基と言ひ。龍山、または如蘭亭と号した。その祖父良鼎（巴陵と号す）、父良文（君山と号す）とともに伊賀藩の世臣で、ともに詩文を善くした。『五山堂詩話』巻四に、「藤堂良道字子基号龍山攬詩袖中見訪余読之欽為名手……其尊人君山先生其祖巴陵先生詩毛聖民皆已收入采風集中昇平日久武弁之家亦得逞

才詩壇「真可^レ美也」という記事がある。

『采風集』巻二の校訂者のうち、陸原淳については、この詞華集の巻三に彼の詩が二篇ばかり載っていて、そこに字は子淳、蒼厓と号す、加賀の人と注記してある以上のことを筆者は知らないが、山地寛は字を孟教と言ひ、蕉窓と号した。江戸の人で、亀田鵬斎に学び、また、詩を善くした。『天保三十六家絶句』にその詩が十八首ばかり載っているが、蕉窓は弘化四年に七十一歳で歿したという。

『采風集』巻三の校訂者のひとりである宮師杜は、巻一のなかにその詩が二首採られていて、その注記によって、字は詩老、一の字は美堂と言ひ、備中庭瀬藩の家臣であつたことが知られるが、他のひとり、豊後の林秉民については、筆者はなんら知るところがない。

さて、稲毛屋山によって編集され、以上に列挙した人々によって校訂された『采風集』は、その三卷三冊のうちに、一八二名乃至は一九四名の詩人の作品を収めている。いま、ここに「一八二名乃至は一九四名」と奇妙な言い方をしたのは、この詞華集にはいづれも「文化戊辰新鐫」とありながら、その巻之三が木寿(百年)の詩を載せた第三十六頁で終っているものと、さらに頼惟柔(杏坪)以下十二人の詩を載せて、第四十頁^{けつ}までであるのと、二種類あるからである。筆者はこの後者を架蔵しているが、本巻にもこれが影印されている。

ところで、『采風集』はその編者稲毛屋山が多くの詩人と親しく会ひ、「随つて得て、随つて録した」その詩を集めたもので、その詩人の数は二百名近くに達し、そのなかには無名の人々も少からず見い出されるが、それらの詩人たちの選択と配列に偶然的なところがあるのは、否定し難いことだろう。この詞華集にその作品を采られた人たちには江戸の詩人が多く、また、四国、殊に讃岐の詩人が多いが、これは編者の稲毛屋山が讃岐出身であるところから自ら^がそのような結果となつたのだろう。これに反して、京都及び浪華の詩人は少く、中国地方や九州の詩人に至ってはさらに少いが、これらの詩人たちの作品は続篇に収めるつもりであつたのかもしれない。というのは、刊行された

『采風集』はその「初編」であつて、ついで「二編」が出される予定であつたからである。但しこの「二編」はついに出版されなかつたようである。

『采風集』の編集が偶然的な要素に支配され、菊池五山の言う通り、「少しく鑒裁に乏しい」憾みがあつたとすれば、これに対して編者の卓れた鑑賞眼によって、詩の厳正な選択がなされている詞華集は、柏木如亭編の『海内才子詩』である。

柏木如亭（一七六三—一八一九）は名を昶、字を永日と言い、如亭（はじめは舒亭）と号した。通称は門作である。宝暦十三年、徳川幕府の小普請方大工棟梁の子として、江戸の神田村松町に生まれた彼は、はやく天明年間に市河寛齋と識り、その江湖社の最も古い社友となり、また、最も有力な詩人となつた。寛政六年に三十二歳で小普請方大工棟梁の職を退いたのちは、しばしば信濃や新潟に遊び、のちには京都や四日市や、さらに備中の庭瀬などを放浪して歩き、その間、時たま江戸に帰つたことはあつたが、もはや生活の根柢はそこになかつた。そして最後に文政二年七月、京都の黒谷で、その放浪詩人としての生涯を閉じたのである。享年五十七歳であつた。その詩集に『木工集』『如亭山人藁・初集』『如亭山人遺稿』があり、また、『訳註聯珠詩格』『詩本草』の著があることは、周知のところだろう。（なお、如亭の生涯については、揖斐高氏の『改訂・柏木如亭年譜』に詳しい記述がある）。

『海内才子詩』は柏木如亭が土御門公安倍菊坡に依嘱されて編んだ詞華集であるが、揖斐高氏によれば、如亭は京都で安倍菊坡と識つたばかりでなく、文化九年にはその邸に寄寓したという。『海内才子詩』の編集の話があつたのはたぶんその頃のことと思われるが、その間の消息は、山本北山がこの詞華集に寄せた序文のなかの次のような言葉によつて窺い知ることができるだろう。

「天朝太史安公身居_ニ縉紳之貴_一至心愛_レ才欲_レ自_リ所_レ知推_レ及_レ所_レ不_レ知_ニ其才之美_一於_ニ是大蒐_ニ集海内才子詩_一梓而

敷^キ乎天下^ニ一鳴^{ヲス}方今升平之盛^{シナルヲ}也……于^レ時江戸詩人栢如亭客^ス居^ニ于平安公寬而明不^レ立^ニ崖際^ヲ於異郷^ニ便愛^シ其才^ヲ為^ニ斯集^ノ總裁^ト」

『海内才子詩』はこの文化九年頃にはだいたいの編集を終えて、すでに版本に彫られてもいたようであるが、如亭が絶えず四方に遊歴して、京都に在る日が少く、それを校定することができないままに歳月が流れ、ついに文政二年に如亭が死んでしまったために、やむを得ず、かねてからその編集の輔佐をしていた安倍家の塾の都講鈴木竹坡がその仕事をうけついたのでという。この詞華集がいよいよ刊行されたのは、翌文政三年のことである。

『海内才子詩』は五卷三冊から成っており、卷末の刊記には、江戸の須原屋伊八、須原屋茂兵衛、大坂の加賀屋善藏、河内屋喜兵衛、河内屋八兵衛、京都の堺屋仁兵衛、梶川七郎兵衛、楠見利助の書肆が名をつらねている。その装幀にはいかにも如亭らしい神経がよく行きとどいていて、左肩に普通よりは少し狭い短冊形の枠で、書名を囲んでいる、鶯色の表紙と言ひ、その上欄の空白を広くとった組みと言ひ、字体と言ひ、すべてが瀟洒な感じをひとに与える。開卷まず村瀬栲亭と山本北山の序文について鈴木竹坡の例言があるが、その次にはこの詞華集にその詩を収録された詩人の名を並べた一覧表が掲げられている。これには詩人たちの字や号のほかに、その俗称がいちいち記されていて、なかなか便利であるが、なかには編者にとって未詳のものがあつて、ところどころその部分が空白になっているのはやむを得ないことであつたらう。

収録された詩人たちは「京都之部」「江戸之部」「大坂之部」「各国之部」「羽流縉流之部」「閨秀之部」の六部に分つて、配列され、前の四者にそれぞれ一卷があてられているが、後の「羽流縉流之部」と「閨秀之部」とともに「卷之五」に収められている。当時の三都をはじめとして全国の目ぼしい詩人たちのほとんどすべてがここに網羅されていると言つてもよいが、「閨秀の部」の最後に長玉僊という祇園の歌妓の可憐な傷心の詩が載っているのは、いかにも如亭らしい選択である。この『海内才子詩』も「初集」と銘うっており、当初は「二編」「三編」を嗣出する予定であ

つたらしいが、これは実現されなかった。

『湖山樓詩屏風』は幕末から明治へかけての詩人小野湖山が編んだ詞華集で、その第一集と第二集の二冊は、嘉永元年に刊行され、第三集と第四集は乾坤の二冊として、明治十九年に出版された。

小野湖山（一八一四—一九一〇）は旧姓を横山と言い、のちに小野と称した。その名は巻、または長愿、字は懷之（のちに舒公）である。文化十一年に近江国東浅井郡高畑村に生まれ、十三歳のときに父に伴れられて京都に赴き、頼山陽に謁して、将来、この人の門に入りたいと竊かに思ったのだという。しかし、山陽がまもなく歿したので、湖山はその素志をとげることができなかった。天保三年、十九歳で江戸に出た湖山は梁川星巖の玉池吟社に入って詩を学び、大沼枕山、竹内雲濤、遠山雲如、鈴木松塘その他の社中の人々と親しく交わって、盛んに詩の唱酬をした。やがて湖山は参河国吉田の松平侯に仕えて、その儒官となったが、国事に奔走して追放され、諸国を放浪したのち、藩主松平侯の吉田の居城に幽屏された。明治維新後は、東京によばれて総裁局権弁事に任ぜられたが、その職にあること僅かに三ヶ月ばかりで辞任して、郷里の近江国へ帰ったのであった。彼が再び上京したのは明治五年のことで、上野池の端に居を定めて、それを「談風月樓」と名づけ、以後は専ら詩人として活躍した。明治四十三年四月に九十七歳の高齢で歿したのである。その著書には、『湖山樓詩稿』『火後憶得詩』『鄭絵余意』『北遊剩稿』『湖山近稿』『湖山近稿続集』『湖山消閑集』『蓮塘唱和集』等がある。

『湖山樓詩屏風』は、唐の白楽天がその友人元微之から贈られた詩を屏風に書きつけたという故事に倣って、湖山がその親しい師友の詩を手録したものであるという。いま、嘉永元年刊行の「第一集」と「第二集」を見るに、前者には頼山陽から鈴木松塘に至るまでの二十三人、後者には岡本花亭から嶺田楓江に至る二十七人の詩人たちの作品が収められているが、その詩はすべて七絶で、その数は各集ごとに百篇ずつである。だが、この詞華集の著しい特徴は、

詩人の名が掲げられているあとに附けられた、湖山執筆の長短さまざまな注記にあり、そのなかで湖山は当該の詩人と自分との関係を述べたり、その経歴や、時には逸事を語ったりして、まことに興味津々たるものがある。そしてこのことによって、この『詩屏風』は単なるアンソロジーではなく、温い交友の記念帖というようなものになっているのである。例えば、巻頭の頼山陽についての注記には、「余年十三随_二先人_一入_レ京進謁_二先生_一(山陽)一尔時竊謂再遊受_二業於門_一世事参差志願未_レ果而先生遽帰_二道山_一於_レ今為_レ憾……」とあり、また、醉死道人竹内鵬については、「九万(鵬)性放誕不羈嗜_レ酒任俠動輒連飲數日不知_レ止稍不_レ当_レ意則狂呼怒罵凌_二辱其座人_一又甚拙_二生理_一家道日艱琴囊書簞典売殆尽是以前友親戚拏咎_二其所_一為_レ而九万傲然不_レ顧誓以_二醉死_一為_二本願_一可_レ謂_二奇人_一矣」とあって、その放誕な生活ぶりが知られるのである。

次に明治十九年刊行の『湖山樓詩屏風』の第三集と第四集は、湖山自身がその「小引」で語っているところによれば、彼が明治二年に官を辞して、故郷の近江国に帰ったときにそこで編んだものらしいが、第三集に二十八名、第四集に二十三名の詩人の作を収めており、このうち大槻磐溪、嶺田楓江、遠山雲如、梁川星巖、張紅蘭、大沼枕山、宇野南村、鷺津毅堂、鱸(鈴木)松塘、梅痴上人、竺松靄、小原鉄心の十二人を除いて、他はすべて新しくこの「第三集」と「第四集」に収められた人たちである。また、詩も七絶ばかりに限らず、古詩や律詩なども採られているが、その他の点では、編集の体裁といい、詩人の名のあとに長短の注記が附せられていることといい、以前の「第一集」や「第二集」と同じである。

以上の三種の詞華集がその編者の個人的な鑑識や嗜好によって選ばれ、編者の個性が全体を一貫して感ぜられるのに対して、次の嘉永二年に刊行された『撰東七家詩鈔』と『撰西六家詩鈔』とは、ともに浪華の書肆北尾墨香が編集したもので、いわば「詩人年鑑」的な性質を帯びている。但しこれは時間的ではなく、空間的に、大坂を界として

東西の地域を分ち、それぞれの代表的な詩人を数人ずつ選んで、その詩を集めたものである。しかし、『撰東』には、西の篠崎小竹と広瀬旭莊の序跋を掲げ、『撰西』には東の安積良斎に序を書かせているところなど、編者のジャーナリスティックなセンスとアイディアとがはたらいっていると言えよう。その『撰東』によせた序文のなかで、篠崎小竹は「所謂撰東離撰而東也。撰西并撰而西也。其所以分東西者。猶角力者之分部、欲使觀者品評其強弱勝負。各有所左担」と言っているが、当時はこのような興味を以て、この詞華集を手にとった人々も少くなかったに違いない。

『撰東七家詩鈔』は七卷五冊から成り、菊池五山、安積良斎、野田笛浦、大槻磐溪、斎藤拙堂、梁川星巖、中島棕隱の詩を収めて、各人に一卷ずつ当てがっている。このうちで菊池五山はその全詩集がないだけに、『今四家絶句』（寛齋、如亭、詩仏、五山の七絶を収む）や、『文政十七家絶句』『天保三十六家絶句』『嘉永二十五家絶句』等のうちに収められているその絶句集とともに、この『撰東』のなかの「五山堂詩稿」は珍重すべきものと言えよう。まして、この「詩稿」のうちには、絶句のほかに古詩や律詩が多く採られているのである。

『撰西六家詩鈔』は六卷五冊から成り、篠崎小竹、広瀬淡窓、草場珮川、後藤松陰、広瀬旭莊、坂井虎山の詩を収めて、各人に一卷ずつを当てていることは、『撰東七家詩鈔』と同じである。

広瀬青村が執筆した『撰西六家詩評』という文章がある。こんにちでは『日本儒林叢書』第三卷のなかに収められているが、これは『撰西六家詩鈔』のうちの六人の詩人の詩風について短評を加えたものである。例えば篠崎小竹については、「先生之詩。力瞻足而神瀟灑。詞婉折而意串注。無有短促迫切之音。齷齪酸餒之氣。使入想見其襟懷浩浩、無所不容。但甘滑流利者居多。而着勁沈着者甚少。此為可憾耳」と言い、広瀬淡窓については、「先生之詩。淡而不薄。峭而不尖。老潔蒼辣。別作天地」と適評を下している。また、後藤松陰については、「先生山陽高弟。文名夙著。其在浪華。亦与篠翁対峙。其詩着力。多於古体見之。山陽恃才使氣。発乎辞者。豪放奇傑。先生為其所薰陶。勢不能不相似。夫疾行者善蹶。疾食者善噎。欲以豪放壓世者。動随虚喝空咄。山陽

之詩。醇疵不_レ相掩_一。以_レ此也」と言っているのは、頼山陽の詩への批判も兼ねた面白い批評である。なお、青村は最後に「六家総評」として次のような短評をしている。

「予嘗読_ニ宋六家文_一。知_ニ其概略_一。今試比_ニ擬之_一。小竹似_ニ廬陵_一。淡窓似_ニ老泉_一。珮川似_ニ南豐_一。春草似_ニ穎濱_一。旭莊似_ニ東坡_一。虎山則半山也。抑古賢名儒。已有_ニ定論_一。而六先生德声日躋。其所_レ詣不_レ止_ニ於此_一。則其優劣。不_レ宜_ニ以今日_一論_上。且詩文殊_レ途。勢難_ニ脗合_一。予所_ニ比擬_一。在_ニ其風致相類_一耳」

広瀬青村は名は範治、字を世叔といい、豊前国の人で、本姓は矢野氏。広瀬淡窓の咸宜園に学んで、のちにその養子となった。『撰西六家詩鈔』が刊行された当時は三十一歳であった。

『六名家詩鈔』は植村蘆洲と真下晩菰とが江戸の著名な六人の詩人の家集に就いてその佳作と思われるものを選んで編み、万延元年に刊行した選詩集である。

植村蘆洲（一八三〇—一八八五）は名を正義、字を子順といい、天保元年に江戸で生まれた。家は世々幕府の与力であったが、蘆洲は壮年の頃、その職を弟に譲って、専ら詩作に耽ったという。彼は早く十九歳のときに、大沼枕山の門に入って、詩を学び、以後、枕山に深く傾倒した。『蘆洲詩鈔』『詠物詩鈔』等の著書がある。

真下晩菰（一七九九—一八七五）は名を穆、字を元教といい、本姓は益田氏である。甲斐国大藤村に生まれ、のち江戸に出て、天保七年には真下家の家禄を購って、その家格を相続したという。そして江戸西丸表御台所人や支配勘定出役などを経て、蕃書取調所調役になったが、慶応二年に陵軍奉行並に支配となり、翌三年十月には御留守居支配を命ぜられた。明治維新以後は横浜に住み、私塾を開いて、子弟を教育したが、彼はまた、卓れた書家でもあった。しかし、この『六名家詩鈔』の編集は主に植村蘆洲がしたように思われる。

『六名家詩鈔』は六卷六冊から成り、藤森弘庵、大槻磐溪、横山（小野）湖山、大沼枕山、鷺津毅堂、梅痴上人の詩

を収めて、各人に一卷一冊ずつを当てている。前の『撰東』や『撰西』の詩鈔でも、そのなかの詩人に各一卷ずつが当てられていたが、しかし、この『六名家詩鈔』においては、各人に一卷一冊ずつが当てられているので、これはアンソロジーというよりは、むしろ編者によってなされた各詩人の選集のシリーズとも言うべきものである。

この『詩鈔』に収められた六人の詩人はすべて江戸で活躍していた人たちであるが、当時の多士済済たる江戸の詩壇のうちから特に右の六家を選んだことについて、植村蘆洲はその「凡例」のなかで次のように述べている。

「江都人文之淵藪。巧^{ナル}於詩者。固^リ不^レ止^ニ於斯^一。或將^レ有^ニ阿^ル所^レ好之^一。夫弘庵老人之老蒼。磐溪文学之清警。湖山道人之勁健。枕山仙史之富瞻。穀堂学人之沈雄。梅痴尊者之麗縉。皆優入^ニ乎古作者之域^一。非^ニ庸言浮響之徒所^ニ能望見^一。然則東方騷壇之旗鼓。舍^レ此何適^ニ矣^一」

この『詩鈔』に収められた六家の詩には古体あり、律詩あり、絶句ありで、諸体を兼ね具えており、また、それは編者たる植村蘆洲の鑑識によって精選されているので、この『詩鈔』によってわれわれは右の六家の詩の特色を、それぞれ一冊のうちに窺い知ることができるのである。

ところで、最後の『近世名家詩鈔』は、右の『六名家詩鈔』と違って、まったくのアンソロジーである。伊予の関重弘がその同窓たる丹波の藤田千歳とともに編集して、万延二年（この年に文久と改元）に京都の書肆文栄堂及び擁万堂から刊行したのであるが、巻頭には江戸の藤森弘庵の序文が掲げられている。だが、筆者は寡聞にして、この編者たる関重弘、藤田千歳のふたりについては知るところがない。ただ、文久元年に京都で刊行された『近世詩林』（生口弘編）という詞華集のなかにこの二人の詩が採られており、その注記によれば、関重弘は字仲毅、号は雲濤で、伊予の人であり、藤田千歳は通称亀、字は千歳、栗堂と号して、丹波国園部の人である。

この詞華集は上・中・下の三巻三冊から成り、九十七人の詩六百二十九篇（巻頭の目録の最後に九十六家詩六百二十五首

とあるが、これは中巻の最初から三番目、即ち斎藤誠軒と大沼枕山の間に入るべき野本耕を逸しているのである）を収めている。その詩人は有名無名さまざまであり、その出身地も日本全国にわたっているが、編者たちが京都に住んでいた関係からか、畿内の詩人が比較的に多いように思われる。いずれにせよ、この詞華集のうちにも幕末の詩人や詩壇の情勢の反映が見られると言えよう。なお、江戸の詩人長谷川昆溪が安政七年に編んだ詞華集に同じ表題の『近世名家詩鈔』というのがあるが、それとこの関・藤田編の詞華集が別物であることは言うまでもない。

『湖山楼詩屏風』は内閣文庫所蔵本を底本として使用した。その影印を許された内閣文庫に深甚なる謝意を表する。

第七卷 目次

詩人名は姓号に統一した

采風集

皆川淇園	11	山本緑陰	17	宮詩老	23	豊青丘	35
柴野栗山	12	中井董堂	17	藤崎琢斎	24	源喨霞	35
中井竹山	12	石田醒斎	17	高田西菴	24	岸東門	35
後藤芝山	13	森岡懷楓(松陰)	18	小野華陽	24	平君山	36
紀(細井)平洲	13	森岡足菴	18	松井梅屋	24	窪田東岳	36
井上金峩	14	市河寛斎	19	国府秋水	24	菊岡徂山	36
平沢旭山	14	市河米庵	19	柴野碧海	25	白華岳	30
中山松石	14	松浦篤所	20	川合春川	25	泉川安昌	30
久保城山	14	宮沢細菴	20	島本子方	25	德永華山	30
細合半斎	15	井遂菴	21	雲室	25	井桑里	31
十時梅厓	15	田徳郎	21	菊池五山	26	野原天姥	31
古屋昔陽	15	原長卿	21	後藤木斎(漆谷)	26	青山訥斎	31
菊池衡岳	15	勝棠庵	21	山田呆呆	28	岸田意亭	32
菊池西皐	16	高竹中	21	山田呆呆	28	福井謙斎	34
樋口丹台	16	関松窓	21	野蕉石	28	小西仙島	34
山本北山	16	紀東里	22	冢鹿溪	28	橘崑崙	35
		堀龜潭	22	日稔	28	橘景斎	35
		柏木如亭	22	龜東溪	29	穗琴峯	35
				山田鹿庭	29	田中桃林	35

紀(浦上)玉堂	橘立生	鈴木鹿泉	三木半村	山緑軒	原士徳	深井丕景	深井景福	深井景温	長坂円陵	井上烏涯	菅谷五痴(伯美)	劉魁春堂	復(芝庵)	長曾根五峯	昭恭	平(杉本)懶菴	平祐光	左東洲	成島東岳	岡野逢原	蔭山南山
45	45	45	44	44	44	44	44	43	43	43	42	41	41	41	40	40	40	40	40	39	39
泉沢履齋	朝川善庵	海野柯亭	海野螭齋	市川梅顛	大窪枕流	大窪詩仏	鈴木小蓮	鈴木芙蓉	葛西因是	中村至觀	石山奕菴	源鷹丘	源鶴齋	龜田綾瀨	龜田鵬齋	梶原藍渠(再出)	吉川反齋	佐藤緑窓(文姫)	今川細桃	八木樅陰	小島梅外
52	51	51	51	50	50	49	49	48	48	48	48	48	48	48	47	46	46	46	45	45	45
三邨懿文	大塩魯齋	呉榕堂	呉逸齋	中野睡仙	卷菱湖	館霞舫	館柳湾	井岡桜僊	源台山	藤堂龍山	藤堂君山	藤堂巴陵	山地蕉窓	牧梅所	牧竹所	直井整齋	野沢酔石	後藤繁堂	谷本麓谷	深谷柳塢	関謙齋
57	57	57	57	57	57	57	56	55	55	55	54	54	54	54	54	53	53	53	53	53	52
大田南畝	奥田義堂	入江櫟菴	菊田叔徳	林蓀坡	中野素堂	中野蘭園	石川龍山	林柳川	田蕉窓	中根春風	日比東湖	恵晁	野村盛芳	源東溪	北条螭堂	源琴台	春木南潮	陸原蒼厓	日庸	伊達笹亭	太田錦城
63	62	62	62	61	61	61	61	60	60	60	60	59	59	59	59	58	58	58	58	58	58
			高以親	佐佐木重忠	佐佐木宜固	佐佐木宜克	立石永純	雨森牛南	鳥海松亭	膝玉山	小谷子実	松宮子善	太田子慮	頼杏坪	木敷愚庵(未百年)	相田佩弦	五雲	江原万年	糸井(奥山)榕齋	松尾東菜	大沼竹溪
			66	66	66	66	66	65	65	65	65	65	65	64	64	64	64	64	63	63	63

海内才子詩

永田士孝	小沼西陳	薩埵德軒	町口梅嶠	高階梅厓	宇都城昆台	草鹿玄龍	秋篠常倫	和田泰仲	中村岳州	平(杉本)懶庵	寺崎伯道	山田鶴鳴	足立侗齋	服部叔信	池田原博	田能村竹田	祝田星齡	石川竹厓	村瀬栲亭	
91	91	91	91	91	90	90	90	90	89	89	88	88	88	87	87	86	86	85	83	
角川泰道	藤井梅齋	佐野竹溪	佐野藍園	朝倉荊山	井上柯亭	十川水壺	洪谷螭亭	加地棕齋	松井羅州	佐々木柳所	角鹿玄都	竹村杉溪	海保青陵	白井赤水	松崎北山	賴山陽	瀬尾緑溪	武元(郵)登庵	白井蘭齋	堤南溪
96	96	96	96	96	96	95	95	95	95	95	95	94	94	94	93	93	92	92	92	92
菊池五山	大窪詩仏	市河寛齋	吉田南涯	蜷川篁洲	谷棟楼	星合約夫	安部顯山	岡崎解亭	馬杉九皐	大森求古	杉岡嗽桑	山厓渠陽	中野龍田	三浦訥齋	鈴木竹坡	高月庭	芳田月溪	浦上(紀)春琴	小栗十洲	佐野山陰
103	101	100	100	100	100	100	99	99	99	99	98	98	98	98	97	97	97	97	96	96
井阪松石	金谷若水(遷齋)	早崎南浦	早崎篁齋	春田横塘	井阪尚白	九鬼考槃	篠崎聶江(小竹)	篠崎三島	矢学遽	北条霞亭	藤崎琢齋	清水王谷	小島和卿	小島恬窩	宮沢細菴	松浦篤所	松井梅屋	三枝(木敷)愚庵	卷菱湖	葛西因是
112	112	112	112	112	112	111	111	110	109	109	109	109	109	109	108	107	107	106	105	105
林素公	長蘭腸	山田半仙	高紅葉	佐羽淡齋	沢由古(熊山)	河内静齋	山崎雪堂	高橋濟菴	武拙齋	高雲溟	菅茶山	山本公魯	齋藤霞亭	岡野逢原	鈴木大凡	穂琴峯	水野精故	恩田蕙楼	秦滄浪	林漆園
117	117	117	117	116	116	116	116	116	115	115	115	115	115	114	114	114	114	114	114	113
																				井阪慶夫